Economic Trends

発表日:2024 年 2 月 9 日(金)

酒飲料･外食ランキングに映る地域社会（下編）
～みんな違ってみんないい～

第一生命経済研究所 経済調査部
首席エコノミスト 熊野 英生(TEL:03-5221-5223)

47 都道府県の県庁所在地と政令指定都市 5 地域の 52 か所で、世帯の消費支出の大きい地域のランキングを作成した。下編では、酒類 7 品目、ノンアル飲料 11 種類、外食 9 種類について、上位ランキング 10 位をリストアップしてみた。その内容からは、まだ知られていないご当地グルメがいくつもあることを知ることができる。

お酒のランキング

レポート・下編では、食料品のランキングの中で、2 人以上世帯の酒と飲料の消費支出から調べることとしてみたい。まずは、酒に分類される清酒（日本酒）、焼酎、ビール、ウイスキー、ワイン、発泡酒・ビール風アルコール飲料、チューハイ・カクテルの 7 種類をみていきたい（図表 1）。

（図表１） １世帯当たりの消費支出の都市別ランキング（お酒）

単位：円/年間

	清酒		焼酎		ビール		ウイスキー	
1	秋田市	11,276	鹿児島市	14,307	青森市	18,507	山形市	5,151
2	新潟市	8,591	大分市	10,650	盛岡市	17,881	青森市	4,671
3	盛岡市	7,710	宮崎市	9,931	新潟市	16,953	神戸市	4,611
4	長野市	7,549	山口市	9,756	広島市	15,932	仙台市	4,487
5	甲府市	7,508	北九州市	9,267	富山市	15,907	静岡市	4,366
6	山形市	7,269	那覇市	9,102	京都市	15,554	新潟市	3,957
7	宇都宮市	6,971	佐賀市	8,420	秋田市	15,202	北九州市	3,955
8	金沢市	6,688	岡山市	8,215	神戸市	15,062	川崎市	3,912
9	富山市	6,615	青森市	8,212	長野市	14,801	横浜市	3,822
10	水戸市	6,554	堺市	8,117	東京都区部	14,597	宇都宮市	3,819

	ワイン		発泡酒・ビール風アルコール飲料		チューハイ・カクテル	
1	横浜市	7,464	広島市	16,090	仙台市	8,663
2	東京都区部	6,603	新潟市	15,283	大阪市	8,230
3	熊本市	6,421	熊本市	14,802	青森市	7,842
4	さいたま市	5,691	高知市	14,511	盛岡市	7,649
5	静岡市	5,555	青森市	13,518	富山市	7,557
6	新潟市	5,384	鳥取市	12,823	新潟市	7,283
7	千葉市	5,348	福岡市	11,694	山形市	7,274
8	広島市	5,112	盛岡市	11,693	堺市	6,855
9	京都市	4,782	佐賀市	11,441	札幌市	6,715
10	秋田市	4,629	宮崎市	11,361	福島市	6,493

注：総務省「家計調査」（2023年）から筆者が計算したもの。

日本酒と焼酎はわかりやすい。秋田市は、日本酒消費量が首位として有名で、新潟市の 2 位もうなずける。焼酎は、鹿児島市が首位、大分市が 2 位、宮崎市が 3 位と順当だ。産地と消費地はほぼ重なっている。別の視点でみると、いくつかの品目の上位に、同じ地域が発見できる。お酒好きの地域と呼べる先である。新潟市は、日本酒 2 位以外にも発泡酒・ビール風アルコール飲料で 2 位、ビールで 3 位などを占める。熊本市はワインで 3 位、発泡酒・ビール風アルコール飲料で 3 位である。青森市、盛岡市、山形市も上位が目立つ。アルコール好きな地域であることがわかる。これまでのランキングで、東京都区部が上位に来ることは少なかった。ワインの消費額は例外的に、東京都が 2 位に来て、首位は横浜市、4 位がさいたま市である。ワインの消費は大都市型である。

ノンアル飲料のランキング

お酒以外の飲料、すなわちノンアルコール飲料はどうだろうか（図表 2）。品目は、緑茶、紅茶、茶飲料、コーヒー、コーヒー飲料、果実・野菜ジュース、炭酸飲料、乳酸菌飲料、乳飲料、ミネラルウォーター、スポーツドリンクの 11 品目である。緑茶＝茶葉のお茶は、産地を反映していて、首位は静岡市だ。佐賀市、浜松市と続く。しかし、それが茶飲料＝ペットボトルのお茶になると産地との関係性は薄らぐ。日本人のお茶の消費額は、緑茶よりもペットボトルが多くなっている。紅茶は、ワインに似ていて、東京都が首位、神戸市が 2 位、川崎市が 3 位と大都市中心である。不思議なのは、盛岡市が果実・野菜ジュース、炭酸飲料の首位であることだ。青森市は、ともに 2 位は青森市、山形市はともに 6 位になっている。両飲料には何か補完効果があるのだろうか。ノンアル飲料の品目をみて感じるのは、いくつかの品目の中でペットボトルのお茶が最も大きな市場になっている点だ。先の果実・野菜ジュース、炭酸飲料も大きい。ペットボトルのお茶のランキングは、首位が前橋市、2 位が富山市、3 位が宇都宮市、4 位が福島市である。敢えて特徴を探すと、夏の最高気温が高く、ペットボトルのお茶が欲しくなるという理由なのだろうか。

（図表2）１世帯当たりの消費支出の都市別ランキング　　（ノンアルコール）

単位：円/年間

	緑茶		紅茶		茶飲料		コーヒー		コーヒー飲料		果実・野菜ジュース	
1	静岡市	10,124	東京都区部	1,486	前橋市	11,475	大津市	10,321	高知市	6,882	盛岡市	11,715
2	佐賀市	5,047	神戸市	1,450	富山市	11,199	京都市	10,311	富山市	6,851	青森市	9,831
3	浜松市	4,865	川崎市	1,307	宇都宮市	10,666	金沢市	9,553	岐阜市	6,810	秋田市	9,668
4	宮崎市	4,750	千葉市	1,290	福島市	10,408	秋田市	9,301	那覇市	6,610	宇都宮市	9,321
5	北九州市	4,412	横浜市	1,201	千葉市	10,394	徳島市	9,215	青森市	6,573	富山市	9,201
6	宇都宮市	4,228	さいたま市	1,187	水戸市	10,361	盛岡市	9,003	仙台市	6,564	山形市	8,784
7	川崎市	4,218	名古屋市	1,137	盛岡市	10,036	札幌市	8,945	山口市	6,437	前橋市	8,635
8	熊本市	4,195	広島市	1,124	青森市	9,732	岡山市	8,628	和歌山市	6,246	鹿児島市	8,472
9	長崎市	4,158	岡山市	1,120	川崎市	9,513	水戸市	8,598	福島市	6,221	福島市	8,458
10	相模原市	4,115	相模原市	1,114	甲府市	9,319	長野市	8,562	大津市	5,967	高知市	8,349

	炭酸飲料		乳酸菌飲料		乳飲料		ミネラルウォーター		スポーツドリンク	
1	盛岡市	11,527	前橋市	9,442	広島市	4,445	那覇市	8,079	山形市	2,527
2	青森市	11,354	和歌山市	8,903	堺市	4,173	さいたま市	6,108	秋田市	2,419
3	札幌市	10,191	金沢市	8,745	岡山市	3,920	水戸市	5,987	宇都宮市	2,361
4	仙台市	9,185	鹿児島市	8,301	徳島市	3,852	鹿児島市	5,789	山口市	2,248
5	福島市	9,160	宇都宮市	7,710	大阪市	3,845	千葉市	5,681	富山市	2,201
6	山形市	9,109	水戸市	7,380	松江市	3,661	東京都区部	5,543	青森市	2,129
7	大阪市	9,041	奈良市	7,169	佐賀市	3,603	浜松市	5,249	千葉市	2,124
8	高知市	8,921	津市	7,110	高知市	3,399	前橋市	5,220	前橋市	2,113
9	長崎市	8,913	大阪市	6,698	川崎市	3,399	和歌山市	5,027	鹿児島市	2,099
10	宇都宮市	8,895	千葉市	6,639	仙台市	3,384	広島市	5,005	宮崎市	2,018

注：総務省「家計調査」（2023年）から筆者が計算したもの。

外食ランキング

外食の消費支出ランキングは、地域色が一層際立っている（図表３）。種類は、日本そば・うどん、中華そば、寿司、和食、中華食、洋食、焼肉、ハンバーガー、喫茶の 9 種類である。

日本そば・うどんで最も支出の多いのは高松市である。讃岐うどんと言えば、誰でもピンと来る。しかし、中華そば（ラーメン）の首位は、筆者にはすぐにわからなかった。首位は山形市である。2021 年に現在 2 位の新潟市に抜かれることはあったが、それまで 8 年間は首位で、2022･23 年も連続首位である。寿司は、金沢市が首位である。近江町市場や香林坊周辺に新鮮なネタの寿司屋が多く所在すると思う。実は、外食の上位には、これまで登場しなかった名古屋市が上位に来る。洋食は 2 位、寿司は 3 位、ハンバーガーも 3 位である。これまでのランキングには、これまで大都市は上位に現れにくかったが、外食ランキングでは登場しやすい。ほかには、東京都が喫茶の 2 位に来る。都内の商店街にはどこでもフランチャイズの喫茶店がある。それを抜くのが岐阜市だ。岐阜の喫茶店には、モーニング・セットが提供されていて、その内容が充実しているという。ハンバーガーでは、高知市が首位だ。ご当地グルメには、龍馬バーガーというのがあるらしい。このように、筆者が知らない地域の食文化がまだまだあることを外食ランキングから知ることができた。

（図表３）１世帯当たりの消費支出の都市別ランキング　（外食）

単位：円/年間

	日本そば・うどん		中華そば		寿司		和食		中華食	
1	高松市	18,994	山形市	17,593	金沢市	24,716	静岡市	40,848	堺市	10,149
2	静岡市	11,793	新潟市	15,224	静岡市	22,472	高松市	39,122	横浜市	9,319
3	岡山市	9,582	仙台市	13,074	名古屋市	21,347	岐阜市	38,702	岐阜市	9,216
4	宇都宮市	9,427	宇都宮市	12,035	堺市	20,358	佐賀市	38,273	川崎市	8,810
5	山形市	9,125	富山市	12,017	岐阜市	19,828	名古屋市	36,733	名古屋市	8,335
6	岐阜市	8,922	福島市	11,331	相模原市	19,828	富山市	36,612	千葉市	7,943
7	仙台市	8,858	高知市	11,293	富山市	19,058	宇都宮市	33,102	東京都区部	7,315
8	徳島市	8,736	盛岡市	10,789	京都市	18,786	横浜市	32,166	宇都宮市	7,249
9	北九州市	8,572	川崎市	10,738	山形市	18,422	堺市	31,458	神戸市	6,951
10	さいたま市	8,567	金沢市	10,166	福井市	18,327	広島市	31,110	奈良市	6,875

	洋食		焼肉		ハンバーガー		喫茶代	
1	宇都宮市	22,994	高知市	16,250	高知市	7,986	岐阜市	15,099
2	名古屋市	19,604	堺市	15,270	徳島市	7,831	東京都区部	14,421
3	高松市	19,563	大分市	14,365	大津市	7,779	名古屋市	14,120
4	横浜市	19,066	名古屋市	13,942	福岡市	7,740	さいたま市	13,407
5	川崎市	19,031	佐賀市	12,268	奈良市	7,609	川崎市	12,310
6	富山市	18,827	富山市	11,521	鹿児島市	7,575	千葉市	12,014
7	岐阜市	18,764	さいたま市	11,365	大阪市	7,485	横浜市	11,473
8	静岡市	17,724	高松市	11,227	富山市	7,218	神戸市	10,999
9	札幌市	17,624	山形市	11,195	那覇市	7,102	大津市	10,416
10	東京都区部	17,586	山口市	11,184	千葉市	6,983	宇都宮市	10,218

注：総務省「家計調査」（2023年）から筆者が計算したもの。

各種ランキングは多様性を映す

総務省「家計調査」は、例年、発表直後にご当地ランキングの原データとして活用される。本稿は、従来、部分的に活用されていたランキングを投網をかけるように広範囲に行ったものである。有名なのは、ギョーザの消費支出ランキングだが、地域興しにこのデータが使われる様子から感じるのは、「データ分析には宝＝お金が眠っている」ということだ。ランキングを作って初めて、自分の地域が全国１位だということがわかって、全国の消費者に対して、その地域の消費量が多いのだからきっとそのご当地グルメは美味しいものだと直感させる。「消費支出が日本一」というメッセージが、ご当地グルメを猛烈にアピールする構図なのだ。

筆者が多くのランキングを調べてわかったのは、首位ではなくても、上位にランクインした地域のグルメも魅力が劣らないということだ。金子みすずの「みんな違って、みんないい」という詩の通り、多様性を楽しむ感覚が大事だ。2024 年初に筆者が高校生まで生まれ育った山口市が、ニューヨーク・タイムズの発表する「2024 年に行くべき世界の 52 か所」の第 3 位に選ばれた。自分が馴染んできた山口市について、世界 3 位という高い評価が今一つ実感が湧かないが、そうだとしても地元の山口市が再評価されると嬉しい。多様性のある世界で、様々なよいコンテンツが再評価されることは歓迎すべきことである。

ご当地グルメの分析に戻ると、上位に上がった地域もさることながら、北海道や九州などが登場していなかった。その背景には、農林水産物の食材が豊富で、生鮮食品に購買力が流れているからだろう。むしろ、内陸の都市が多くランクインしたのは、内陸の都市の方が調理されたおかず、スイーツなどを好んで食べる習慣が強くあるからだろう。北陸地域がランキング上位に来やすいのは、1 世帯の住居が大きく世帯人数が多くなり、1 世帯当たりの消費支出が他地域よりも大きくなりやすいという性格があるからだと考えられる。そうしたデータ上のバイアスがあるとしても、「家計調査」という経済統計が地域興しの目的に利用されて、「宝」を生み出すプラットフォームになっていることは高く評価できると思う。

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。